

猿飛佐助
目次

- ◎イデヤ組打御参なれ……………1
- ◎後に目はないか不自由な奴だ……………5
- ◎予の腕前を見よやツ……………9
- ◎天から降ったか地から湧いたか……………15
- ◎腕前は此方が兄貴だぞ……………19
- ◎反対に一泡吹かせて遣ろう……………26
- ◎裸体踊りを御覧に入れん……………30
- ◎詩を作るより田を作れ……………35
- ◎不義はお家の御法度……………41
- ◎女を摘むなんて太い奴だ……………45
- ◎此の野郎場処に事欠いて……………51
- ◎猿飛佐助は武士でござる……………56
- ◎云わぬが花かと心得ます……………61
- ◎乃公等も一寸手伝おうか……………65

- ◎豆盗人は此奴でござる……………70
- ◎ヨシ此奴を喧嘩させて遣ろう……………75
- ◎行き掛けの駄賃だ……………81
- ◎軍を追始めないと我々が困る……………86
- ◎夫れ相当の礼儀を以て参られよ……………91
- ◎一つ事件を惹起してくれ……………97
- ◎頭が砕けても知らないぞ……………102
- ◎人間並に何を吐す……………107
- ◎天狗の孫ではあるまいか……………113
- ◎泥棒と術比べは張合がない……………118
- ◎天下でも盗む心になれ……………123
- ◎ヤイ破坊主目を覚せツ……………128
- ◎大阪城内の槍試合……………133
- ◎花より団子の主義だ……………139

◎天下 <small>てんか</small> に通用 <small>つうよう</small> しないぞ……………	144
◎彼 <small>あいつ</small> 奴 <small>ぬす</small> 盗 <small>ず</small> 人 <small>ひと</small> 眼 <small>まなこ</small> をして居 <small>い</small> るよ……………	149
◎泥 <small>どろ</small> 棒 <small>ぼう</small> の癖 <small>くせ</small> に胆 <small>きも</small> 玉 <small>たま</small> の小 <small>ちひ</small> さい奴 <small>やつ</small> だ……………	154
◎肴 <small>さかな</small> は骨 <small>ほね</small> が残 <small>のこ</small> してある夫 <small>そ</small> れでも甜 <small>なめ</small> ろ……………	159
◎猿 <small>さる</small> が取 <small>とり</small> 次 <small>つぎ</small> とは珍 <small>めず</small> らしい……………	164
◎一 <small>ど</small> 度 <small>にら</small> 睨 <small>にら</small> んだ眼 <small>がん</small> 力 <small>りよく</small> は狂 <small>くる</small> わないぞ……………	168
◎汝 <small>なんじら</small> 等の <small>びい</small> く <small>く</small> に負 <small>ま</small> けて堪 <small>た</small> るか……………	174
◎テモ奇 <small>き</small> 体 <small>たい</small> の術 <small>じゆつ</small> もあるものじや……………	180
◎却 <small>な</small> 々 <small>な</small> 人 <small>にん</small> 間 <small>げん</small> の化 <small>ば</small> け方 <small>かた</small> が巧 <small>うま</small> いぞ……………	185
◎勝 <small>か</small> つて <small>て</small> 手 <small>て</small> に夜 <small>よ</small> 通 <small>ど</small> し眼 <small>め</small> を剝 <small>む</small> いて居 <small>お</small> れ……………	190
◎マア内 <small>うち</small> 輪 <small>わ</small> 同 <small>どう</small> 志 <small>し</small> だから許 <small>ゆる</small> してやる……………	195
立川文庫について……………	205
解説 加来耕三……………	207

猿飛佐助

◎イデヤ組打御参なれ

虎は死して皮を遺し、人は死して名を遺す。建武の昔は大楠公正成、降つて真田幸村、元禄四十七義士の快挙、明治聖代の乃木大将、各々其の目的は異りと雖も、志は一なり。或は勤王と云い、忠君と云い、節義と云う、何れも武士道の亀鑑として、千載に伝うべきの大人物に相違なく、当時の天下を背負つて立つたる大器量人と云つて然りである。左ればにや勇将の下に弱卒なし、一門郎党にも豪傑勇士又尠なからず。就中今回説き出す忍術の大名猿飛佐助は、真田幸村の郎党にして、七人勇士の随一と呼ばれ、変現出没極まりなき快男子であつた。之よりボツ／＼其の物語りに取り掛ろう。豪傑猿飛佐助は、ソモ如何なる素性の人物であらう。処は信州鳥居峠の麓に、鷲塚佐太夫と云う郷士があつた。元は信州川中島の城主森武蔵守長可の家来であつたが、主君武蔵守小牧山の合戦に討死以來、根が忠義無類の鷲塚佐太夫二君に仕える心はないと、浪人して程遠からぬ鳥居峠の麓に閑居なし、少々の貯えあるに任せ、田地畑を買求めて郷士となつた。此の佐太

夫に二人の子があり、姉は小夜、弟は佐助。処が姉の小夜は、生れながらの美人であつて氣質も到つて嬌しい、夫れに引替弟佐助は、当年漸々十才だが、生来の大力無双、お負けに身軽な事は驚くばかり、毎日鳥居峠の山中へ入り込み大木に攀じ登り、木から木へ伝つて飛び廻り、樹の上で猿なぞと、鬼来いごっこをして遊ぶと云う有様。真逆左様な事もなかるうが、何んしろ身軽な事は非常なもの、十間二十間の高い処より、平気で飛降り飛上り、又は鹿も通わぬ断岩絶壁を駆け廻る事、宛然平地を行くが如く、村人は何れも舌を捲き、甲「驚塚の佐助坊様は、人間の出来ない事をなさるじやないか」乙「ウム、此の間も乃公が猿を見付けて、昵と覘つて居ると、坊様が飛んで来て、与太爺、彼の猿は坊が生捕つて遣るから、鉄砲なぞ放すなと仰しやつて、驚くじやねえか、猿よりも早く、スラ／＼と樹の梢へ攀じ登り、枝の上で頻りに猿を追つ掛けて居たが、到頭猿奴が負けて仕舞い、逃げ場を失つて生捕られたよ。乃公は今迄彼んな身の軽い人は見た事ないよ」丙「ウム、何うも奇体だ。此の間も谷間を猪と駆け比べをやつて居たよ。事に依ると猿の生れ変わりじやあるまいか」と、様々に噂をして居る。佐助は左様な事には頓着ない。相変らず鳥居峠の奥深く分け登り、猿鹿猪なぞ相手に、飛び廻るのを仕事にして居たが、一日何かツ

クぐくと思案の体、佐「待てよ、乃公も早や才だ。只毎日猿や鹿を相手に跳ね廻つて居た処で仕方がない。昨夜も阿父さんの仰しやつたには、当時戦国の時代だから、腕次第何んな出世でも出来る、腕を磨き胆力を鍛えるには、武術を修業するに限るとのお言葉、一つより武術の稽古を始めよう」何んしろ末には真田家の郎党となり、天晴天下に名を轟す人物だ。少年とは云え豪い考えを起した。サア其の翌日より、朝は早くから鳥居峠の奥の院へ出て参り、立木を相手に、エイヤボン／＼と剣法を励んで居る。スルト村の者は、甲「オイ、佐助坊様は、此の節商売替えたよ」乙「ウン、手前も見たか、奥の院で一生懸命に立木を打ん殴つて居るよ」丙「ハッハ、何んと可笑しな真似をするだやアないかい」と、寄ると触ると此の噂。佐助は左様な事は耳にも入れず、例に依てボン／＼エイヤツと、毎日烈しく遣つて居る。処が一日一心不乱に立木に打つ附かり、佐「お突きツ、お胴ツ、お面ツ」果ては木剣投げ捨て、佐「ヤア、打物業は面倒なり、イデヤ組打御参なれ」と、無手と大木に抱きつき、佐「ヤツ、ウーン、何を糞ツ」と、夢中になつて大木を捻じ倒さんと、力味返つて居る折柄何処ともなく呵々と嘲笑う声が聞える。佐助は憤として、佐「ヤイ、何奴だ、乃公が必死に剣法を遣つて居るのに、笑うと云うがあるか。出

て来い承知せんぞツ」と、云いつつヒヨイと振り向いて見ると、物髪にして白雪を戴くかと疑われたる一人の老人が、ニコく笑つて立つて居る。佐「オヤツ、今笑つたのは貴様じゃな」老「ウム、左様だ」佐「何故、笑つた。返答せい、次第に依ては老人でも許さんぞ」老「ハツハ、ハ、ハ、コリヤ佐助、其方が幾等立木を相手に剣法を学んでも、夫では死物を敵とするも同然、更に上達する氣遣いはない。夫れほど其方は剣法が覚えたいか……」と、心ありげな老人の詞に、佐助も氣色を和げ、佐「叔父さん、私は武術の極意を覚えたいのじゃ」老「シテ、何うする積りじゃ」佐「腕前優れた人間となり、天下に名を挙げたい考えでございます」老「豪いッ、少年ながら天晴なる精神、ヨシ其方の熱心なる志に愛で、之から乃公が教えてやる」聞いた佐助はハツと夫れへ平伏なし、佐「叔父さん、何うぞお願い申します」老「オ、心得た、サア来い」と、佐助を頂上の広場へ連れ行き、老「コリヤ佐助、ソモ武術と云うは、一芸に秀ずれば沢山だ。武芸は十八般あり、悉く会得する事は容易でない。其の一つに図抜けさえすれば、余の者は学ばずとも出来る。一以て方に通ずとは此処の事。慾張つて彼れも此れもと遣りたがる奴に限り、少しも上達する者ではない。尚又武術と云うものは、自分の胆力を練り、変化を考え、人に打たせ

ない様にするが肝腎。宜いか……分つたか。ソレ乃公が斯うやって身構えて居る、身体に何処か隙があるか何うじゃ」佐「へエ、隙はあります」老「然らば、打つて見ろ」佐「叔父さん、打つても宜うございますか」老「オ、宜いとも……」佐「御免……」と、云うより早く佐助は、エイと正面より打ち込んだ。スルト斯は如何に、今迄居た老人の姿は、パツと消え失せて仕舞つた。

◎後に目はないか不自由な奴だ

不思議と云うも愚なり、少年佐助は迂路くと、四辺見廻して居る処を、突然背後より足をすくわれて、バツタリ前に打つ倒れた。老人はニコくと笑いながら、ヒヨイと前に姿を現わし、老「ソレ見ろ、何故足許に気をつけぬ。人の隙が見えても、自分の隙を防ぐ術を知らぬ様では駄目だ。我が身の油断をしないのが武術の極意だ、万事其の心得で居ろ。今日は最う之れで宜い。毎日此処へ来るのだぞ、忘れては不可んぞ」と、云うかと思えば、老人の姿は掻き消す様に消え失せる。佐助は夢に夢見る心地。佐「オヤツ、奇態な

叔父さんだ。マア宜いわい、毎日来て遣ろう」と、其の後は雨の降る日も風の日も、怠りなく広場へ出掛け、怪しき老人に従い、一生懸命武術を励んで居る。果ては傲性我慢の佐助、家へ帰るは面倒臭いと、四五日分の弁当を用意して来て、夫れが食つて終う迄は少しも家へ帰らない。奥の院の籠堂へ来て其処へ寝み、夜が明けると又出掛ける。処が或夜のも事、佐助は昼間の疲れて、グツスリ寝込んで居ると、丁度真夜中頃と思う刻限、件の老人忽然と立ち現われ、老「コリヤ佐助く、汝は何故正体なく寝込んで居る。乃公が此処へ来たのが分らぬか」と、叱り付けられ、佐助は目を擦りく起き直り、佐「ヤア、之はお師匠様……、昼間の稽古で、身体がへなくになり、疲れてグツスリ……」老「黙れツ、武術を心掛けて居る者が、前後を知らぬ程寝ると云う事があるか。暗夜の礫と云うではないか。何日何時敵に出喰わすやも分らん、万事に油断は大敵じゃ。今夜は許すが、此の後何日来るやも分らぬから、乃公が来た時寝て居ると、殴りつけるぞツ」と、云い捨てて何処ともなく立ち去つた。之じゃア佐助も堪らない。昼間は一生懸命隙間もなく稽古を励み、疲れ切つても楽々と寝る事が出来ない。何日何時老人が歩いて来るか分らないのだから、油断も隙もあつたものじゃアない。流石の佐助もブツく愚痴を溢し出し

た。佐「ア、睡い、稽古をして貰うのは有難いけど、之では身体が続かない。お負けるに夜分何時来るか分らぬと云われては、辛棒が出来なくなる。乃公は彼の老人に責め殺されるのかも知れない……。イヤ、左様な弱音を吐いては又叱られる。ナニツ糞ッ、之れ位いでウ……。ム……。」と、力味返り、我れと我が心を励まし、油断なく目を見張って居るが、思わず知らず、ツイトロくくと居睡りますると、突然腰をポンと蹴られ、アツと驚き目を覚すと、例の老人が枕頭に突つ立って、老「コリヤ、白痴者奴ッ、乃公が来た事も知らず、腰を蹴られて驚く奴があるかッ。若し敵であつたら、貴様の命は最う無くなつて居るのだぞ。馬鹿者奴ッ、何うも生命を粗末にする奴だ」と、小言を云って立ち去つた。佐助は茫然として、佐「何時の間に来たのだらう。生命を取られると思えば寝るんじやアないが、真逆左様な事もあるまいと、ツイ油断をすると蹴られる。コリヤ何うも堪つたものじやない。ヨシ明日の晩は一つ乃公の方で、反対に声を掛けて遣らう」豪胆不敵の少年佐助は、其の翌晩になると、佐「サア、今夜は死物狂いだぞ……。」と、夜具の中に寝て居る様な風に見せかけ置き、片隅へ身を潜め、今かくと待ち受けて居ると、真夜中頃になつて、漸々件の老人が歩いて来た。佐助は目早く見つけ、佐「イヨ、来たぞ、大方蒲

団の処へ来て、寝て居ると思つて蹴るに違いない」と、呼吸を凝して窺つて居ると、二三期手前迄来た老人は、ヒヨイと立ち止つて、老「ハ、ハ、ハ、ハ、佐助今夜は乃公を一杯掛ける積りで、其処に隠れて居るじゃアないか」と、云われて佐助は慄といたし、佐「オヤッ、此の老爺犬か猫みた様に、暗い処でも目が見えるの可知ら……。お師匠様隠れて居るのではないので……。一つ今夜は貴公を驚かそうと思つて……。」老「ハッハ、ハ、ハ、ハ、貴様今夜一生懸命になつて居るが、乃公が来た足音が分るか」佐「へエ、少とも分りません」老「夫では、未だ修業が足りない。何んなに忍んで来ても、足音が分る様でなければ駄目だ。以後気をつけい」と、云い捨てて立ち去る。後に佐助は、佐「何うも、恐ろしい人間もあつたものじゃ。真暗闇を来るのが分つて堪るものか。お負けにワザと跣足で来る仕事なのだ。怪しからん事を云う老爺だ」と、佐助は呟やいて居る。然るに翌晩も余程氣をつけて居たが、何うしても側迄来るのが分らない。俄かにエイツと云う声に、ハツと背後を振り向く内に、最う肩を打たれる。老「コリヤ、左様な事では不可ん。唐朝の公治長は鳥の啼声さえ聞き分けたと云う位、人間は心眼と云つて、心の眼を開いて居れば、何んな小さい物音でも聞え、鼻を摘む様な闇夜でも、歴然と見えるものだ。貴様後に目はないか

不自由な奴だ。前に目のある人間は世の中に沢山ある。四方八方に目を持たなければ、逆も豪い者にはなれん。気を附ける」叱り飛ばしてパイと立ち去る。佐助は腕組みして、佐「フーン、妙な事を云う老爺だ。鰈や比良目じやあるまいし、後に目があつて堪るものか。夫れこそ化物じや……然し大方油断をするな、八方へ眼を配れと云う事なんだろう」斯う云う塩梅で、毎日毎夜一通りならぬ稽古を受け、丁度三年許り修業をすると、今は早や佐助も全く其の極意に達し、暗夜でもアリ／＼と物が見える、鳥の啼声こそ分らないが、十間二十間向方より忍んで来る人の足音は、歴然聞える様になつて来た。

◎ 子の腕前を見よヤッ

人学ばざれば智なし、玉磨かざれば光りなし。佐助は凶らずも鳥居峠に於て、奇体の老人より昼夜の別ちなく、一心不乱に武術を教わつた。夫れが為め僅か三ヶ年で天晴なる腕前となり、尚も勇み励んで、怠らず勉強して居る。或朝の事例に依つて稽古場と定めた広場へ来たつて見ると、老人は既に来たつて待ち兼ねたと云わぬばかりに、老「イヤ、

今朝は其方に我が妙術の極意を伝える。有難く頂戴に及べよ」と、恭しく一卷の巻物を取り出し、老「コリヤ佐助、之を汝に与える間、生涯肌身につけて身の行を謹めよ。或は戦を為すにつけても、英雄豪傑に出合う際にも、此の中に認めてある事を弁えて居れば、決して遅れを取る事はない」と、懇ろに教訓を垂れ、件の一卷を手渡しする。佐助は天にも登る心地して、佐「ハッ、貴重なる御巻物を譲り下さるのみならず、懇々との御教訓、決して忘却は仕りませぬ。就ましては何卒御姓名を承わりとう存じまする」老「成程、今迄我が名を明さざりし故、其の不審は道理千万今こそ名乗つて聞かす。我こそは摂州花隈の城主戸沢山城守の実父戸沢白雲齋と云える者である。我家には祖先より代々伝わる一つの妙術あり。世に所謂忍術之れなり。今日本に於て此の術を極めたる者、俣山城守と其の他数人ある。我れ年来諸国を漫遊致し、如何にかして天晴なる少年を見出し、此の術を譲らんと思えども、目鏡に叶いしもの嘗てなし。然るに三ヶ年以前、当山中を通行いたせし際、其方が身軽の働と云い、武術に熱心なる殊勝の心掛け、我ながら心密に感心の余り、斯る少年に我が忍術を授けなば、所謂鬼に金棒天下に敵なしと心得、白昼は武術を仕込み、其の上夜分に忍術を授けたのである。最早汝の腕前ならば、水遁、木遁、金遁、土

遁、火遁、其の他有ゆる術を行う事が出来る。此の上共に身の行を謹み、良き主を撰んで奉公せよ。屹と天下に名を挙げるは必定である」と、聞いた佐助は愈々平伏なし、佐「ハ、ッ、斯は有難き御言葉、三ヶ年の永の年月、日夜御教導下されし御恩は、海より深く山より高く、お礼は言葉に尽されませぬ。必らず御教訓を守り、師匠の御名を汚す様な事は仕らず、此の段御安心下されます様」と、三拝九拜して、不図顔を上げて見ると、斯はソモ如何に老人の姿は、何れに参りしや更に影さえ見えない。流石の佐助もハッと驚き、四辺見廻して居ると、何処ともなく声あつて、老「ヤア、佐助驚く事勿れ。最早之れが此の世の別れである。折があれば悴山城守に對面せよ。其の時の印に之れを取らずぞ」と云うと共に、パツタリ前に落ちたる鉄扇、之はと佐助二度吃驚、件の鉄扇取り上げて見ると、十三本骨の立派な鉄扇、親骨は銀の象眼を以て「振り下す劍の下の深見川、踏み込んでこそ浮む瀬もあり」と、武術の極意が刻んである。佐助は押し戴き、佐「ハ、ッ、師匠の御遺品として、肌身放さず所持致すでございませう。夫れにしても今一度お顔を……」と、云う時又も声あつて、老「コリヤ佐助、折角三ヶ年の間習い覚えし忍術も、身の行い悪ければ役には立たぬ。呉々も忠孝の道な忘れなよ。最う左らばだ」と、云うかと

思えば、パツと立つたる白雲と共に、師匠白雲齋は雲に乗つて東の方へ飛び去つた。佐助は奇異の思を為し、暫らく其の後姿を伏し拜んで居たが、漸々に氣を取り直し、佐「ア、お名残り惜しい事である。只此の鉄扇を師匠と思ひ、常に肌身離さず持つて居るより外に仕方がない」と、悄然として件の一卷と鉄扇を懐中なし、籠堂へ引返し、夜具引つ担ぎ我が家を差して戻つて来る。大体此の頃合忍術と云えば、日本に於ては戸沢白雲齋の右に出るものなく、其の極意を極めた人であつたが、生涯弟子を取らなかつた為め、門人は沢山ない。夫れゆえ日本武術の聖と呼ばれた塚原小太郎勝義、亀井流槍術の元祖亀井新十郎、まつた石川五右衛門等も、皆此の白雲齋の一子戸沢山城守の門人であつて、何れも忍術の奥義に達しては居たが、猿飛佐助程の腕前はなかつたのであつた。夫れは偕て置き、豪胆不敵の少年佐助は、十一才より十五才の曉迄、一心不乱に忍術と武術を修業した結果、素晴らしい腕前と相成つたが、片田舎には相手がなから、左様な術を实地に行つて見せる訳にも行かない。深くも包み隠し素知らぬ顔で相交らず、鳥居峠へ分け登り、以前の如く猿や鹿を相手に、毎日く遊び暮して居る。或日の事名主善右衛門が、村内軒別へ触れ廻り、名「明日は、上田の御領主真田様の若君と三郎様が、猪狩りの御催しで、鳥居峠へ

お越しになるのじゃ。万一粗相があつては相成らぬから、明日一日は遠慮をして、村の者は誰一人も峠へ行く事はならぬ」と、夫々申し渡す。スルト少年佐助は、佐「何んじや、真田家の若君が猪狩り……、面白いな、ヨーシ名主が何んと云つたつて構うものか。一番内処で乗り込み、樹の上で見物して遣らう。若し乃公の遊び朋友の猿や猪を討ち取らうとした時は、邪魔をして助けて遣らねばならぬ。之れが朋友の好誼と云うものじゃ」と、妙な考を起した佐助は、素知らぬ振りして、翌日を待ち兼ねて居る。愈々其の当日と相成つた。朝は早天より、信州上田の城主真田安房守昌幸の嫡子与三郎幸村、生年此処に十六才とは云え、智仁勇三徳兼備の麒麟児と云われたる若大将。例に依つて氣に入りの郎党、望月六郎、穴山岩千代、海野六郎、三好清海入道、同じく伊三入道、篁十造の六人を左右に従え、家来二百名許りを勢子として召連れ、威風堂々として馬上悠かに鳥居峠へ繰り出だし、此処に狩倉は始まつた。幸村自身は峠の八合目の程好き場処に陣を取り、勢子が追出す獲物を、近侍の郎党と共に、遠矢にかけて射倒しく、主従互いに功名手柄を争いつつ、今や狩倉は酣と相成り、頻りに興に入つて居る折しも、丁度幸村の立つたる頭上に、生い茂つたる杉の枝が、風もなきにガサくと怪しき物音がした。側に控えし海野六郎、

倍と頭上に目をつけ、六「ハテナ、何だか怪しいぞ……」と、昵つと見揚げて居たが、忽ち驚きの声高く、六「ヤ、若様彼れを御覽遊ばせ、大きな猿奴が密んで居りますぞ」幸「ナニ、猿が居ると申すか……ドレ何処に……」と、六郎の指さす方を眺めると、如何様小牛程もあらんかと思われる大猿が、爛々たる両眼怒らし、幸村主従を睨み下して居る。幸「オツ、好き狩物御参なれ。六郎始め皆の者、予の腕前を見よヤツ」と、弓を満月の如くキチ／＼と引絞り、狙を定めてヤツと一声、兵弗と切つて放した。咄嗟猿は射貫かれたかと思いの外、飛び来る矢を右の手で確かと受け留め、幸村眺めて呵々と嘲笑う。流石物に動ぜぬ幸村も、此の体見るより或は驚き且つは怒り、幸「ヤア此奴畜生の分際として予が射て放せし矢を、右手に受け留めるなぞとは小癩千万、イデ今度こそは……」と、又も矢継早に二の矢を番え、勢い鋭く射て放せば、又もや左手に丁と受け留め、相変らず怪しき声して嘲笑う。二本迄遣り損じて幸村怒り心頭より発し、幸「ヤア、武田家の旗下大名に於て、今孔明と呼ばれたる真田安房守昌幸の嫡男与三郎幸村にむか、小癩な振舞推参なり」と、大喝一声ハツタとばかり睨み据えると、皆ても不思議や件の大猿は、幸村の威光に恐れたものか、身体を竦めて居たと見る間に、キャツ／＼と苦しき悲鳴の声諸共枝の上

より大地へ差して、頭顛倒と落ち来り、ブル／＼震えて逃げもやらず、幸村の足下へ平伏する。

◎天から降ったか地から湧いたか

窮鳥懐に入る時は、狛師も之れを獲らず、幸村始め臣等一統、何れも奇異の思を為し、四方を囲んで見て居る折しも横紙破りの三好清海入道ズカ／＼と進み寄り、三「オヤツ、此ン畜生奴、誰あつて矢面に立つ事の出来ない若様の矢を、二度迄も美事に受け留め、天晴武術の心掛けある奇体な猿だと思つて居たが、到頭若様の威光には敵わないで、睨み落されたものだから、人間らしい真似をしやアがって、助けて下さいと云わぬばかりに、手を合してお辞儀をするとは洒落れた事をしやアがる。若様斯んな者は叩き殺し、煮て猿汁にして食いまししょう」と、突然猿の首筋引つ擱んだ。無茶苦茶者の清海入道に掛つては堪らない。今や拳骨で殴り据えられんとする危機一髪折しもあれ、忽ち頭上の杉の枝より、ヒラリ飛降りた一人の少年あり。突然清海入道の手許へ躍り込むよと見る間に、振り

上げたる利腕ムツと掴み、ヤツと叫んで、左しも大兵肥満の清海入道を目よりも高く差し上げ、少「ヤイ坊主、乃公の友達を煮て食うとは何うだ。叩き殺されて堪るものか」と、傍えの松の根元を目掛け微塵になれと投げつけた。投げられたる清海入道も、何んしろ真田家名題の豪傑だ。クル／＼と筋斗打たせ、途中でヒラリと身を翻えし、スツクと向うへ突つ立ち上り、眼を怒らしハッタと睨まえ、三「ヤイ小僧、天から降つたか地から沸いたか、僅か十四五才の小粋の分際で、人も恐るる三好清海入道を取つて投げるとは猪虎才なり。汝ッ勤弁ならん、覚悟しろ」と、云うより早く、突然少年に掴み掛つた。少年はヒラリ／＼と身を躲す其の早さ。流石負けず嫌いの清海入道も、彼方へウロ／＼此方へウロ／＼。三「ウム……、此奴ナカ／＼素敏こい……、オヤツ姿が消えて無くなつた……」と四辺キヨロ／＼見廻して居る。スルと少年は何時の間にやら、四五間向うの松の枝に腰打ち掛け、少「ハ、ハ、ハ、坊主此処じゃ／＼」と、手を拍かれ、ヒヨイと見揚げる清海入道、三「オヤツ、宛て天狗の孫の様な事をする小僧だ。オノレ松の木諸共引倒してくれん」と、坊主頭に向鉢巻キリ、と締め、双肌押し脱ぎ、件の松の幹に双手を掛け、引つ抱えて金剛力を出し、ヤツウーンと押し切ると、松は根元から揺ぎ出した。少年

は此の体見るより、猿猴の梢を伝うが如く、枝から枝へヒヨイ／＼飛び移り、少「ヤア坊
 主、其処には居らんぞ此処だ／＼……」と云われて清海入道、ヒヨイと見上げて切齒を為
 し、三「ワア、忌々しい小悴だツ。是非共引つ捕えねば承知が出来ない」と、又も其の木
 へ抱きつき、エツウーン、松の木と角角を取つて居る。漸々揺ぎ出して、ヒヨイと上を見
 ると、早や少年は隣の樹へ移つて居ると云う有様。流石大力自慢の清海入道も、最う力も
 根も尽き果て、夫れへ平倒り込んでフウ／＼と、三「ア、苦しい／＼、弟貴様平気で
 見物して居るとは怪しからん奴だ。海野、望月、笈、穴山、貴様等も朋友甲斐のない奴
 だぞ。ワ、若様、ニコ／＼笑つて居られるとは余り殺生じやアございませんか」と、ソ
 ロ／＼愚痴を溢し始める。此の時迄始終少年の挙動に目を附けて居た幸村は、幸「アイ
 ヤ、清海入道腹を立てるな。彼れなる少年は如何にも身軽な振舞であるぞ。ヤア夫れなる
 処の少年、尋ね問うべき仔細あり。苦しゅうない之れへ参れツ」聞いた少年は、ヒラリ身
 を翻えすよと見えたるが、十問ばかり頭上なる松の梢より、飛鳥の如く身を躍らせ、幸村
 の面前へスツクとばかり降り立つた。幸村始め郎党家来の面々、今更らながら少年の振舞
 を見て、或は驚き又は感じ、今の今迄ブツ／＼怒つて居た清海入道さえも、思わず手を拍

って賞め讃す。清「イヨ、此奴鳥の生れ変わりかも知れない。身軽い事は軽業師も遠く及ばん。何うも奇体な少年もあるものだ」と、呆れ返つて珍らしそうに眺めて居る。スルト与三郎幸村も、幸「如何様、奇体の少年である。彼を我が家来といたし置けば、何かと都合の宜い事もあるであろう」と、思つて居ると少年も、幸村の人品骨格を見て、自然と敬慕の心を起し、佐「ハ、ア、之れが真田家の麒麟児と云われた与三郎幸村殿だな。乃公の朋友の猿奴を睨み落した処なんぞは、逆も普通の人間では出来ない仕事だ。師匠白雲齋先生の仰しやつた通り、主を持つなら斯う云うお方を主人と仰ぎたいものだ」と、密かに胸中に覚悟を定め、幸村の言葉を今や遅しと待つて居る。此の時幸村は言葉を和げ、幸「ヤヨ少年、其方は何れの者にて、名は何と申すぞ」少「ハッ、私は此の麓に住んで居ります、郷土鷲塚佐太夫の一子佐助と申します」幸「フム、何処となく人品賤しからずと思ひしが、彼は郷土の倅なりしか。シテ汝の身軽な振舞は、天然自然に習ひ覚えしや、又は誰れかに教導を受け、斯く鍛錬なしたか何うじや……」佐「ハッ、実は云々斯様でございますます」と、戸沢白雲齋より譲り受けたる一伍一什を申述べる。幸村聞く毎に感し入り、幸「然らば我が国で、忍術の大名人と呼ばれたる戸沢白雲齋先生より習ひ受けしよな。道

理で比類稀なる働振りだと思つた。夫れに付けても之なる猿の腕前も却々天晴、定めし汝が仕込んだ業であろう」佐「ハッ、此の猿は私が七八才の時より、互いに友達同様仲好いたし、毎日く遊び戯れて居りました為め、自然と物を受ける術を覚え、今では弓矢を持ては、迎も仕留める事思ひも依りません」幸「フ、ム、畜生と雖も、自然の功は恐ろしいもの。何うじゃ佐助、予が家来となる気はないか」佐「ハッ、私も師匠の言葉に従ひ、之より天下に名を揚げたいと思ひ居りますれば、お差し支えなくば、何うぞ御家来にして下さいませ」幸「オ、宜く申した。此処に居る六人は、予が大切な家来である。汝を加えて七人といたし、真田家の七人勇士といたすであらう。ヤヨ穴山、海野、寛、望月、三好兄弟、此の後は之なる佐助を、兄弟同様に思つて労わり取らせよ」と、家来一統に披露に及ぶ。

◎腕前は此方が兄貴だぞ

婦女は己れを愛する者の為めに粧い飾り、勇士は己れを愛する者の為めに生命を捨ると

かや。真田幸村は凶らずも鳥居峠に於て、少年佐助を得て、大喜び此の事一同に披露をす
ると、三好清海入道は先刻苦しめられた意恨があるから、三「ヤイ佐助、貴様此の後は
我々を兄貴だと思つて、能く云う事を聞くのだぞ。万一少年の癖に、乃公等の云い付けを
背くと承知しないぞ。能く心得て居ろ」と、早や兄貴風を吹かして居る。佐助はニコ／＼
打ち笑つて、佐「ハ、ハ、ハ、ハ、年齢は兄貴だが、腕前は此方が兄貴だぞ」三「オヤツ、
又小癩な事を吐しやアがる。ジャア此処で我々六人と一々腕前比べに及んで見ろ。若様
如何でございます」幸「フム、夫れは面白かろう。一人／＼佐助に立ち向え。決して卑怯
な振舞は成らぬぞ」六人「心得ました」と、狩倉などは其方除け、六人の勇士は互いに身
仕度に及び、先ず第一番に三好伊三入道が飛んで出た。佐助は別に身仕度もせず、手頃の
檜の棒を提げて立ち向い、佐「サア、坊主の叔父さん来い」伊「オヤツ、乃公は未だ叔父
さんと云われる年ではないぞ。汝ッ此の小倅奴ッ」と、伊三入道最初から怒つて掛り、エ
イト叫んで只一撃と打ち込んだ。佐助は心得たりと、発止と受け留め、稍暫らくは上段下
段と、秘術を尽くして渡り合つて居たが、佐助は少年ながら伶俐な男であるから、佐「待て
よ、此奴を殴り据えると、返つて悪まれて都合が悪い。一つ驚かして置いて遣らう」と、

早くも思案を定め、今しも伊三入道が勢い烈しく、打ち込んで来た棍棒を、パツと跳ね返し、エイと一声大地を叩くと見る間に、斯はソモ如何に佐助の姿は、俄かに消えて無くなつた。伊三入道はウロくと、伊「オヤツ、ハテ面妖な……、何処へ来させたのであろう……」と、四辺キヨロく見廻して居ると、遙か向うの高さ二三丈もあると云う岩角に腰打ち掛け、師匠より譲り受けたる鉄扇をサツと開き、平氣の平左で頻りに風を入れて居る。イヤ伊三入道は地団太踏んで口惜しがり、伊「ワア、何時の間に彼処へ飛んで行き居つたか。ヤイ佐助奴、逃げるとは卑怯な奴、早く降りて来い。今度は許さんぞ」と、プンく力味んで居る。幸村は此の体眺めて、幸「アハ、ハ、ハ、ハ、伊三入道最う宜い。貴様は退れッ」伊「イヤ、未だ勝負は相付きません。是非共此の棍棒を奴の頭にお見舞い申さねば……」幸「ハツハ、ハ、ハ、ハ、怒た処で其方には、佐助程の妙術はあるまい。マア勝負なしだ、引き分けく」と、云われて伊三入道不承無承に引下る。続いて清海入道、弟の仇と飛んで出た。之も同じく佐助の忍術に掛つて、キリく舞をさせられ、プンく怒つて引退る。其の次には穴山岩千代、笈十造、望月六郎、海野六郎と、交るく打ち向つたが、何んしろ七八合ホンくと打合したと思うと、佐助が樹の上、岩角へ飛び上り、パツく

解説

加来耕三

(歴史家・作家)

猿飛佐助と、真田十勇士

いよいよ、真打ちの登場――。

本書の主人公・猿飛佐助が、主君・真田幸村（正しくは信繁）を助けて活躍する。『真田十勇士』の物語は、このシリーズ「立川文庫セレクション」の『真田幸村』でも触れたように、「立川文庫」の『ドル箱』となった。

なにしろ、架空の忍者「猿飛佐助」や「霧隠才蔵」を、日本人の記憶の中に定着させたのが「立川文庫」であったからだ。二人がようやくメンバーに加わり、十勇士十人が勢揃いするのも、「立川文庫」においてであった。

もともと「立川文庫」はどこまでも大らかで、十勇士の設定、略歴一つとっても一定しておらず、極論すれば「猿飛佐助」と「霧隠才蔵」の名前を入れかえても、そのまま通用

するような講談が、数多くつくられていた（逆に、このあたりが魅力の一つであったかもしれない）。

江戸時代、すでに十勇士の一・三好清海入道は、中期に成立した軍記物ぐんきもの『真田三代記』に九十歳の高齢で登場していた。が、その身の丈は八尺余り（約二メートル四〇センチ）に及んでいた。それが「立川文庫」の本作ほん『真田三勇士忍術之名人 猿飛佐助』では、ふいに十九歳に改められているかと思えば、同じ「立川文庫」でも、先発する『智謀真田幸村』（本シリーズ前作の底本）では九十六歳とあった……。

これらの記述には、そもそも確固たる論理性はなく、歴史の史料的裏付けもなかった。根本をたどるには「立川文庫」の、各々のその時、担当した作者の、頭の中にでも入り込んでみなければ、不可能であったろう。なぜ、「猿飛佐助」がこのような形になったのか、と問いかけても、答えは永遠に返ってこない。

けれども、「猿飛佐助」は何を語ろうとしたのか——これを検証することは可能である。まず、次のような図式ができた。

——“真田十勇士”を解体する、と“真田”と“十勇士”に二分される。

「十勇士」はフィクションで根拠にとぼしいものだが、彼らの与えられた宿命・使命は「忍び」も含め、最大公約数を「影」に集約することができた。

彼らは歴史の裏方として、何をしたのか。その主君である真田幸村を助けて活躍したわけだが、その幸村も前作でふれたように、歴史の表舞台に姿を現わしたのは、四十九年の生涯の中で、大坂冬の陣に先立ち、大坂城に入城した慶長十九年（一六一四）十月から数えて、たかだか半年あまりにすぎなかった。

しかも彼は、父・昌幸（本名）の裏方Ⅱ「影」をつとめた人物であったともいえた。

つまり、猿飛佐助を含めた「十勇士」の活躍は、真田家における幸村の役割を、物語風に広げたもの、と解釈することもできたわけだ。

加えて、「十勇士」のもちいた軍略・兵法や武術・忍術といったものは、歴史の「史片」として存在していた。「術」からの、各種へのアプローチは可能であり、「真田幸村」を創りあげたものⅡ真田家三代の歴史は、史料・文献的に再現が不可能ではなかった。

歴史学の常套語（じょうとうご）に、「未発の発芽」というのがある。いまだ発せざるの芽、芽吹く前の芽——これは、過去をさかのぼることの重要性を述べていた。

たとえば、読者のあなたを知ろうと歴史家が考えた場合、その父母や家族、もつといえ
ば祖父・祖母の人となりを知れば、理解は深まるとの考え方である。

幸い真田家が忽然と、歴史の舞台に登場したのは、初代の幸隆からであり、その三男・
昌幸が幸村の父となる。史実の「信繁」から「幸村」を創り出した秘訣は、昌幸から幸隆
へとさかのぼることで、より一層、その輪郭を明確化できるに違いなかった。

それは一面、この一族が手にした、乱世を生き抜くための術、叡智、すなわち技術、手
法をも具体化することにつながっていた。

信州（現・長野県）の数多いた土豪の中から現われ、名将・武田信玄と邂逅することに
よって、独自の生き方を探し求めて悪戦苦闘した初代幸隆。その父のおかげで、幼少期よ
り信玄の愛弟子となり得て、その傍らにあつて武田家の軍略・兵法をも学び、家伝に加味
することのできた二代目の昌幸。彼を世に出すために、長篠・設楽原で戦死したともいえ
る長兄信綱、次兄昌輝の残したものは――。

偉大なる二代目・昌幸が、二度にわたつて徳川家康の軍勢に立ち向い、二度とも勝利を
おさめた上田合戦——その真田戦法を修得した信幸（のち信之）と「信繁」|| 「幸村」の

猿飛佐助 [立川文庫セレクション]

2019年12月10日 初版第1刷印刷

2019年12月20日 初版第1刷発行

著 者 雪花山人

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1878-8 2019 Sekka Sanjin, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。